

# 天上の玉をころがすように

植田儀武

ぼくはあなたの前でおどけてばかりいた。

それはひとえにあなたの笑顔を見ていたかったから。

あなたは玉でもころがすようにころころとよく笑った。

覚えているかい。

人影の絶えた駅のベンチで

一晩中他愛もない話をつづけた夜のこと。

伝えたいことはたったひとつだったはずなのに

そしてそれはあなただっけ分かっていたはずなのに

ぼくは荒唐無稽な話をつくることに夢中になり

あなたはあなたで馬鹿っ話にあわせてころころとよく笑った。

それでぼくらは明け方には妙に無口になっていた。

あの夜ぼくらは列車に乗る決心をして駅に向かったはずだった。

あなたは夢見るように言ったよね。

北へ行けばまだ雪が残っているかしら

南へ行けばもう菜の花が咲いているかしらと。

そのときぼくは曖昧な返事で応じたけれど

ぼくだってあなたと乗って行ける列車なら

どこへだって行きたいと願っていた。

それなのにぼくらは列車に乗らなかった。

長距離列車が何本も何本も

ぼくらの前に止まり

大きくドアを開いてくれたというのにさ。

なにかあの夜

ぼくらを駅のベンチに足止めさせたんだろうね。

ぼくらは何年も一緒にいて

もつとも単純なひとことが言えなかった。

あれから四十年。

おそらくあなたはいいおばあちゃんになっていたんだろうね。

相変わらずころころとよく笑うおばあちゃんにさ。

あの日午睡の夢にうみが傾き

うみが夢に氾濫してこなければ

今の今だって。

さよならは言わない

また会うかもしれないと

あなたはリアス式の美しい町に

ぼくは職を求めて人の集まる街にと

中途半端に手を上げてお互いを見送ったけれど

ひよんなとき

ひよんなかたちで

例えば早春の潮の香り立つ海辺で

もし

もしもだよ

あなたに出会うことができたなら。

ああ

それはとてつもない仮定だけれど

それでもまたぼくは

他愛もない馬鹿っ話をつづけるに違いない。

そのとき

あなたは

水底の石がひそやかなつぶやきをやめるように  
押し黙るのだろうか。

それとも

天上の玉をころがすように

ころころと笑ってくれるのだろうか。